

1P09

保育所等における従来の感染症とCOVID-19感染症の予防対策の比較（3） -看護職が認識する現状と課題-

宮崎 つた子¹、大井 恵里亜¹、鷺見 裕子²、
川瀬 浩子¹

¹三重県立看護大学

²高田短期大学

【目的】

保育所等に勤務する看護職が認識する従来の感染症とCOVID-19感染症の予防対策の比較から、その現状と課題を検討した。

【方法】

研究の依頼手続き、研究の方法、調査期間、調査項目、分析方法、倫理的配慮は、第1報と同じである。対象は、A市公立保育所等に勤務する看護職である。

【結果】

対象者は、A市公立保育所20施設と認定こども園5施設に勤務する看護職20名であった。園児数は第1報と同様にばらつきがあった。対象者の年齢は、40代20.0%、50代30.0%、60歳代25.0%であった。従来の感染症とCOVID-19の感染症の予防対策に関する項目の比較では、「感染症対策の実施の有無」、「マニュアルの活用」等の回答に差はなかった。また、「感染源・感染経路の遮断が難しい」、「感染対策の基準が不明確」、「子どもを離して保育することが難しい」、「感染の拡大を止められない」の項目では、従来の感染症に比べてCOVID-19の感染症の予防対策の方が有意に難しさを感じていた。その他、「職員の感染予防対策が十分出来ていない」についても従来の感染症に比べてCOVID-19の感染症の予防対策の方が有意に高く、自由記載にも「予防対策の提案が十分できていない」など、他職種や職員との認識や行動の統一に違いがあることが考えられた。今までと異なる感染症予防対策の工夫は19名が「工夫した」と回答した。その内容は、「アルコール消毒の徹底」、「三密を避ける工夫」、「こまめな手洗い」等であった。また、工夫する上で困ったことは、「園児が密になる機会が多い」、「園児の発達段階ではソーシャルディスタンスを保てない」、「職員間での統一した衛生管理が難しい」などがあげられていた。

【考察】

全ての保育所等で、COVID-19蔓延に伴い様々な感染症予防対策の工夫を行い、園児の健康管理に尽力していたが、看護職は、保育所等の様々な場面からCOVID-19感染症の予防対策の難しさを感じていた。保育所等では、園児の密着を防ぐ工夫をすることに加えて、他職種との連携を強化し、園児の衛生管理が出来るような協力体制を整えていくことが重要と思われる。そのためにも、全ての職種との情報共有を行いながら、COVID-19感染症の感染が拡大していく中でも、それぞれの専門性を生かした適切な感染予防対策を徹底できるような体制が必要であると考えられる。

1P10

認可保育所等における感染症対策の現状～保育士等の予防接種歴及び感染症罹患歴の現状調査からの検討～

鳥海 弘子

秋草学園短期大学

【目的】

保育施設では「保育所における感染症対策ガイドライン」に基づき、感染症対策を実施している。その感染症対策として「職員及び子どもたちの予防接種歴及び感染症罹患歴を把握し、記録を保管することが重要です」と掲げられている。園児の予防接種歴や感染症罹患歴は、入園前の健診からその後も継続的に確認している。本研究では、保育施設職員の予防接種歴や感染症罹患歴の現状を把握し課題を検討する。

【方法】

2020年7月～8月、認可保育所及びこども園8施設の保育者を対象に、無記名式質問紙調査を実施した。質問項目は①属性：性別・年齢・職種・雇用形態、②予防接種歴を母子健康手帳から実際の年月日を記載、③感染症罹患歴を母子健康手帳から実際の年月日を記載④自分自身の母子健康手帳の所有の有無、⑤母子健康手帳が無と回答した理由をお答えくださいとした。本研究者の所属する倫理審査委員会の承認を得た。

【結果】

調査用紙は400部配布し、263部（65.8%）の回収が得られた。不備を除き252部（有効回答率63.0%）を分析した。母子健康手帳にて予防接種歴や感染症罹患歴を確認するため、自分自身の母子健康手帳の有無を確認した。有ると回答した者142名（56.3%）であった。無いと回答した理由は、「紛失した」56人（50.9%）が多かった。

予防接種歴として接種済み者を確認するとツベルクリン123名（86.6%）、BCG113名（79.6%）、麻しん84名（59.2%）風しん45名（31.7%）、MMR13名（11.8%）、MR38名（34.5%）、水痘6名（5.5%）、流行性耳下腺炎9名（8.2%）、B型肝炎2名（1.8%）であった。また、罹患歴は麻しん16名（11.3%）、風しん27名（24.5%）、水痘68名（61.8%）、流行性耳下腺炎36名（32.7%）、帯状疱疹5名（4.5%）であった。

【考察】

母子健康手帳は就学前までは、しっかり記載し活用しているが、その後の活用方法がはっきりしていないため、いつの間にか紛失してしまうことに繋がるのであろう。母子健康手帳の活用方法を子育て支援の一環として実施する必要があると考える。大人になってからの予防接種歴や感染症罹患歴を記載する明確なものではなく、母子健康手帳が一生活用できる健康手帳への変更も今後の課題である。